

〔書 評〕

## 平原綾香

### 『平原綾香と開く クラシックの扉』

(東京新聞, 2017年, p. 165)

軽 部 恵 子

著者の平原綾香は、2003年に「Jupiter」でデビューした歌手である。この曲は、ホルスト (Gustav Holst, 1874-1934) の組曲「惑星」の「木星」で最も有名な部分の旋律に、日本語の歌詞を載せたものである。歌手としての著者の活躍を説明するのに、紙幅を裂く必要はないであろう。

本書の元になったのは、東京新聞および中日新聞で連載されていた「平原綾香と聴く クラシックの扉」で、2014年4月から2017年4月まで掲載された分をまとめた。記事を書くためのリサーチを行ったのは、東京新聞文化部の樋口薫記者である。樋口は平原を「曲の背景や聴きどころを読者に近い目線から、かみ砕いて解説してくれるナビゲーター」(p. 161)として選んだ。その意図は、著者がクラシック・バレエ、クラシック音楽、ジャズ音楽の教育を受けてきたこともあり、樋口が想像した以上の結果を生んだ (pp. 161-162)。まさに、新聞文化部記者とポップス歌手によるコラボレーションの成功である。

本書は、第1章「『映画』とクラシック」、第2章「『文学』とクラシック」、第3章「描かれたクラシック『マンガ』『ドラマ』」、第4章「『季節』を感じるクラシック」、第5章「演じられたクラシック『舞台』『フィギュ

アスケート』], 第6章「平原綾香の『思い出』のクラシック」に分かれる。いずれの章にも、映像でよく流れる曲を取り上げた。

たとえば、本書が第1章の2番目に選んだのは、ドイツの作曲家リヒャルト・シュトラウス (Richard Strauss, 1864-1949) の交響詩「ツァラトゥストラはかく語りき」(1895-1896) であるが、この曲は、スタンリー・キューブリック (Stanley Kubrick, 1928-1999) が監督した映画『2001年宇宙の旅』(1968年, アメリカ) で非常に効果的に使われた。今も、日本では、ジャンルを問わず新製品のテレビコマーシャルによく流れている。もちろん、宇宙に関するニュースでも使われる。だが、あの有名な一節はわずか90秒で、30分以上の交響詩の序奏に過ぎないという (p. 15)。聴きどころは後半の「舞踏の歌」で、ワルツが奏でられ、ラストは「自然や宇宙を表すハ長調の低音と、人間を表すロ長調の高音が交互に打ち鳴らされ、交わらないまま幕を閉じる」(同)。これを読んで評者は、やはり専門家の見解は聞くべきであると思った。

この種の書籍はトリビアの類いに過ぎないと考える向きは少なくないかもしれない。だが、本書は映画、文学、マンガ、フィギュアスケートと、幅広い場面から選んでおり、作曲家は18世紀に活躍したバッハ、フランス革命を経験したモーツァルトとベートーヴェン、19世紀前半にナポレオン戦争とウィーン体制を経験したショパンおよびリスト、20世紀初等に活躍したガーシュウィン、20世紀半ばから終わりまで活躍した武満徹が含まれている。本書を手にとった高校生や大学生は、音楽の背景にある西洋近代史に興味を持ってくれるかもしれない。そうでなかったとしても、ヨーロッパではもちろん、日本でも有名な曲が多いので、大学生やビジネスパーソンの教養として知識を得ておくことに損はない。

本書が取り上げた曲には、ピアニストを描いたマンガで描かれた名曲も含まれる。たとえば、少々野暮ったい音大生がピアニストとして成長して

いく二宮知子のマンガ『のだめカンタービレ』（2001-2010年連載）は、2006年にテレビドラマ化された。その後も特別編やテレビアニメが作られた。ドラマでは、ベートーヴェンの交響曲第7番（1811-1813年作曲）が演奏され、大人気を博した。それまで、交響曲第3番「英雄」（1803年作曲）、第5番「運命」（1808年作曲）、第6番「田園」（1808年作曲）、第9番「合唱付き」（1824年作曲）の方がはるかに知られていたが、明るい曲想の第7番を聴き、ベートーヴェンのイメージが変わった人もいないか（本書が紹介した「のだめカンタービレ」の中の曲は、ガーシュウィンの『ラブソディー・イン・ブルー』である）。それから、風俗街に私生児とした生まれたピアニストの少年がショパン・コンクールを目指す、一色まことのマンガ『ショパンの森』（1998-2016年連載）が2007年にアニメ映画化された（本書では、ショパンの「ピアノ協奏曲第一番」を紹介した）。2018-2019年には、NHKでもアニメドラマとして放映されている。アニメでは、コンクールに挑む登場人物に合わせ、個性の異なる若手実力派ピアニストたちが配役されているが、競演はスポーツの国際試合のようにエキサイティングである。

クラシック音楽はまた、時代の変革を促す力を持つ。評者は、クラシック音楽が西洋近代史、とくに市民革命に与えてきた影響にかねてから注目してきた。大勢の人が共同作業に従事する合唱や、聴衆がホールという空間で感動を共有するコンサートは、ナショナリズム、体制批判、抵抗運動など、時代の空気作りに少なからず貢献してきた。たとえば、フランス革命さなかの1792年、若い将校によって一晩で書き上げられた「ライン軍の軍歌」は、マルセイユからパリへ向かう義勇兵たちが歌い、1795年にフランス国歌「ラ・マルセイエーズ」に制定された。シベリウス（Jean Sibelius, 1865-1957）の交響詩「フィンランディア」（1899年作曲、翌年改訂）は、ロシア支配下のフィンランドで演奏が禁じられていたが、曲名を

変えて演奏されていた。中間部の美しい旋律は、フィンランド第二の国歌とも言われる。ショパン (Frédéric François Chopin, 1810-1849) やリスト (Franz Liszt, 1811-1886) は、民族音楽をモチーフに作品をいくつも書いている。

本書が第1章の最初に取り上げたモーツァルト (Wolfgang Amadeus Mozart, 1756-1791) の歌劇「フィガロの結婚」(Le Nozze di Figaro) は、貴族の初夜権を揶揄したボーマルシェ (Pierre Augustin Caron de Beaumarchais, 1732-1799) の戯曲『フィガロの結婚』(Le Mariage de Figaro) に基づく。原作は1778年に執筆され、1781年に初演されるはずであったが3年間上演禁止となり、1784年にパリのコメディイ・フランセーズで初演された。モーツァルトはウィーンの宮廷詩人ダ・ポンテ (Lorenzo Da Ponte, 1749-1838) とともに、神聖ローマ皇帝で啓蒙思想の影響を受けたヨーゼフ2世 (1741-1790。在位1765-1790) から許可をもらい、戯曲に基づく歌劇をウィーンのブルク劇場で1786年5月に初演した。ダ・ポンテの台本に露骨な貴族批判の台詞はなかったが、物語全体は明らかに貴族を批判していた。

フィガロの序曲について平原は、「ピアノシモノの弦の序奏に、いかにもモーツァルトらしくからっと明るいテーマ」と描写する (p.11)。モーツァルトは、自分が望む作曲活動を認めないザルツブルク大司教と対立し、1781年に大司教のもとを離れてウィーンへ出てきた後だった。評者は、序曲冒頭にある弦楽器の小さく、しかし素早い弓の動きが、一気にクレッシェンドして大音響で演奏する構成から、自分の目指す音楽を自由に書けるようになったモーツァルトが、心のうちからあふれ出る旋律を譜面に記す姿を想起した。

最後に、本書の執筆に当たってリサーチを行った東京新聞の樋口記者を賞賛したい。同記者の丁寧なりサーチ、そして各項目の終わりにあるまと

平原綾香『平原綾香と開く クラシックの扉』

めの知識と「こぼれ話」を付けた構成が大きい。同時に、多忙な平原があらかじめ準備された資料をすべて読み、紹介された作品、関連する映画、小説をすべて自分で鑑賞した上で、記者との打ち合わせに臨んでいた (pp. 162-163) ことも強調されるべきである。本書のタイトルにあるように、読者には、平原綾香とともに開いた扉から入り、クラシック音楽の世界とそれをめぐる歴史・文化を楽しんでほしい。